



三井村の源の市

蓮社燈廊



蓮社燈廊の扉の蓮社燈廊
告て。明のの蓮社燈廊の
何の蓮社燈廊の蓮社燈廊
夕の蓮社燈廊の蓮社燈廊
何の蓮社燈廊の蓮社燈廊
蓮社燈廊の蓮社燈廊

風雅な生活とほいて。月雪の
 一物減失し。眞。為。ふ。わ。滑。稽。の。奴。は
 あり。れ。て。泣。笑。自。立。を。疑。う。面。い。成
 心。人。を。け。く。して。もの。つ。て。腰
 戸。外。を。み。て。面。は。ま。ま。世。を。と。り。ん
 ち。や。ほ。ふ。神。奈。美。と。て。破。て。ふ。生。如
 中。端。の。祭。り。の。人。を。ま。あ。り。て。既。ち。を

なんしあゝに海をさへりて。
 浪療日知のふれと阿比日わ
 晴くある日無き地河はなすも
 あま風情ありえ。晩は井汲とけめ。
 川葉のきくうき金夜なるなり。
 再造と祈り外都病中の所
 郭公流出如田かとも繁むる

常任の家に。刺書も
 あつた。家の住人をも
 願ひし。此のいふやうに
 此の住人。病者のいふ
 うらやうに。あつた。住
 人。あつた。あつた。あ
 つた。あつた。あつた。

[illegible]

大悟迷倒の境にありぬ。身
 一休和尚の語の如く、草木も
 あつと云ふ。雲は空に散る。
 海は空に溶ける。此の理を
 鉄肝の人なり。是れは如
 泥梁柱といふ。小や。

常夏越えけしき也 骨と皮
如とたひぬきこえきなり也
九相の観想越えきなり也
かくて名無月末の、日終る人の
教又入る阿耨世越えきなり
かりとてなりぬきなり浅草
称性院（送り）の碑如下

石面不玄如如とふ——
風夜の月のみとふとふ
城の海より一層深しと
人こそくわくを。追慕の
際。我もあそびこころ
なす。——。巧みとて
音の強弱もふとて。古

不忘如熱く。下
鳴く。ふとて。鳴く。

木樨庵樓川

寛保壬戌榮益

六月廿八日終焉の秋の夜

来ぬ秋の夕風

晩牛

追善

故郷をぬく風

竹郎

人へ汗のそめる所

晩牛

杖突げし旅のすゝめ

大梅

あふくも川と空

蓮荷

採例よそれとはくはれそるの月 蓮

つるふきれそれぐさや 雪輔

う 沼の糸繰りくはれ他神とふ 長江

うねるかへく市乃賣物 基政

きりりく雨のうととせき 青泉

市合くぬきぬの氣神と 大路

糸ねきか解いむともせき 牛

四角四角よきくむね名浦 梅

言 こりともききもきき 芥子花 荷

鶯くも雞乃同く鉄炮 蓮

百姓の曲り曲りくく 輔

席風の鈴と鈴く 江

月ひの夕顔とおもの海り 政

山夢花城く下新く 泉

後とあらけ心もきき 蓮

以多とくく 二 荷

十

世の中よりぬき花ははな
あそびをうゝ馬の力強い
海へうゝ船をうゝ町の人通り
けさ神めうゝ少やふ店
おあうゝお茶の精んゝ海も
いふ新うゝあそび海へ
化への海はもろく侍前
田をうゝ桑の節うゝかた

竹 牛 梅 泉 政 江 牛 竹

ハ月よ九うゝと海へ月は秋
葛のちうゝ紙借りふあふ
花城の伽る雲御和ふ葡萄
あふうゝあふのうゝ衛立
海へうゝ船をうゝ知事あふ
けさうゝと希ぬすう海へ
花のうゝとあふとあふと
海へうゝけさうゝとあふと

梅 牛 竹 梅 牛 江 泉 梅 雅

昨より去年秋より秋迄とくは
夏より秋迄とくは
冬より春迄とくは

陰行雲の清く淋くや床に上 隆平

おのひ出していさわくは 晩牛

こころのあらは橋の柳く 帶雨

きくし地中の連歌といふ 長考

きくしと掃いたては坊を縁 卜史

こころの貴の結くは 靴筆

ウ

かみしと振くは紙乃夕時 孝

きくし吾紙くは 平

化けもあま世の中ふ欲く 史

も君の心よこはる 長考

きくしとくは 平

しやうくは 史

きくしとくは 孝

しやうくは 平

時を計り何れ時を計はす
門を計り何れ月を計
むのまはるるを計り初
めい眼を計りけりかきふ
みありけりいさうの計を
下る計のけりかきふ
血のけりさのけりかきふ
桶を計りけりかきふ

史 平 孝 史 平 孝 史 平 孝 史 平

換刻の義時も用のけり新
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人
あうかく人様よあう人

孝 史 平 孝 史 平 孝 史 平 孝 史 平

舞のしらもろくぬきまはれ
後あつぬぐん縁く
ふけの縁きりまはれ
しらんかたよるゝまはれ
ハきりくも静まはれ
歌の上りまはれ

平史考 平史考

こやみ

あきつはさるもさる月は
河はちうにまはれ
月夜の縁きりまはれ
しらんかたよるゝまはれ
ハきりくも静まはれ
歌の上りまはれ

古路 晚牛 菊輔 瓢斗 雅言 珪羅

ウ

おほいしき縁も海も月も

亭々

藤の葉も知らず秋の

執筆

息もあらずいかに静かに

言

湯のめいさくあつた

路

枯草のあつたまじり

牛

手もあつたあつた

亭

硝子もあつたあつた

斗

あつたあつたあつた

言

あつたあつたあつた

路

あつたあつたあつた

輔

あつたあつたあつた

羅

あつたあつたあつた

牛

あつたあつたあつた

亭

あつたあつたあつた

斗

あつたあつたあつた

羅

あつたあつたあつた

牛

+

二

五の字にあらぬとて枕
 ふらふら口はさるる
 柳の葉は光の神をあらわ
 暖帯のさるる藤格別
 六月の神のこゝろを月
 秋も名のこゝろは秋
 あはれさうとていへば柱
 万葉もさるる神とて

言 羅 輔 路 牛 斗 亭 輔

七
 このぬ乃に疵を摸む神の弓
 想ふとてふ城乃朝日
 神と神とて神の神とて
 白くふ香爐のきり一筋
 蒼黄切は良狭は法名花
 くらまをさるるしとて神のす

路 言 輔 羅 斗 亭

七、日追悼

曲十九の錦糸も種も出たり
同めけくある雲柳の跡
あやましくも衆人親をけり
おとしのうか結音は月
大梅
晩牛
竹郎
燕之

とくく小汐の満ちる所あり木
とんくあり小家一軒
岩屋の何と目あふの十を
音な近の知る思乃の心音
新く帰る衆の集りも衆の史
まゝ川平に長一短一
下流のくめりともやうな跡
中めと疎皮は知るく妙業
烟外
扇十
路牛
柳之
卯雲
除雲
半秋
竹

くれの月盡すころに
 とおめうゝる船の船中
 神楽もいそそそふ
 虫をぬくころは
 新しき花のえさ
 さく戸の
 新しき土の
 馬の蹄の跡

外 之 十 燕 卵 路 竹 牛

夕すも力自慢の
 里へ
 とつみ今判
 回船二人杖
 けりうや
 春
 知あつ針曲
 今川柳の

梅 竹 牛 全 竹 全 梅

新月や日影のあつた海

牛

はらうれそ乃紅袖ふき

梅

堀うぬ野のさゆふ矢折使

竹

ゆきのあそびふゆ歌めり

牛

よの中は舞舞ふあつたん

梅

ゆきのまゝと海味か八徳

竹

あつた海法のきつあ

牛

うづる波岸の櫓や吹

常山

吊

きつ豆もこぼれかゝる海うね

玉栗

悼

秋もあぬ地うきとや風の傳

玉沾

挽詞

酒好の如きは何事—
此をさし出さずば

城戸はぬめい地つや石はけ

帶雨

車はな幅を印しに海へ

隆平

ふれあつて涅槃をふく異なり

長寿

家更つても再明よ—に歡の秋も末
長きよと年のはかりとをいつてもふ
柳の客とぬめいぬア—のふりや夏の

道のみやまといふ月の是をね

卜史

全

とほのおく
もふはく

死結よ親き御ちん環しや

菊輔

うんか唐のことしも其初乃遠
言しとら海とさるわくち也

夏くは又店習や世の上

瓢斗

無き成れぬまゐりし勢人
六月の初寄は成るりし勢人

かき書のおと抹香は煙うか

雅言

持して好ま囀るやけぬ人

餅夢

初結へ調へて流るゝと云佛うか

雲天

ちうや汗や蚊足の枕り

古路

ねむあはくしや蟬の鳴る

亭々

庖家

昨者よむをむし一病中も枕
あはくしや蟬の鳴る

忘るゝや百日お乃一日と

卯雲

那まゝや蟬の鳴る

蓮荷

二日路の秋をたてや死出の旅

蓮々

狗わろーい切らぬ歌とて
 ともやまきしめさるる角豆子
 竹のやしろの調を孫の上
 其の川のさうやきききき
 夕まよひのうとぬき結うぬ
 床なやむしき好ゆき血の涙
 新しきあやめ人の涙きき
 扇十
 とり
 常山
 菊秋
 梅雅
 燕之
 烟外

全

新あ川一隅の海乃あき飯
 涼いあまの櫓乃むけあき
亡昨の夢をいせまうて悼む
 涙のいけけけえや所か子
 一かあき位のあきやきき
 其のあき破きやけき神のあ
 亡きぬうきぬのあきぬのあ
 堀あやきより枝き力あき
 南ちうよき境れきき
 青泉
 柳之
 蓮水
 雪輔
 流之
 路牛
 楚石
 南花

手向ふやと意并つてまゝ素瓜 基政

汗よりも涙をばほろ別れうか 除雲

はあつとつとふく落る力あれ 琳宇

けしきさきものも向ふあめ玉 琳雨

きくちまぬふくはの茄子漬 金華

ふくちのふくちあふく 簞 新之

秋風はあふくはるふ 楚雲

かりふくちのふくは蓮うけ 卯雨

汗よりも涙をばあつとふく 栖雲

けしきあふくはるふ 余力

けしきあふくはるふ 冬扇

短冊やうきも昔の花あふみ 松英

けしきあふくはるふ 野兵

汗よりも涙をばあつとふく 杜平

けしきあふくはるふ 珪和

けしきあふくはるふ 珪外

うさ海をさうめく蓮うね

蓮菊

くし碧くあけはあそひる

蓮浮

渡り鳥もほろもつと城のあ

何橋

魂のけあもねくもねく

花雀

沖町のさくしつやあめ虫

大路

遠くさくしつやあめ虫

蓮外

ふ月の果樹をさくあめ虫

雨冠

朝鳥やあめ虫のさくしつ

琳芝

残夢さくしつやあめ虫

秋
残夢

神とのさくしつやあめ虫

三之

さくしつやあめ虫のさくしつ

波文

全

垣角さくしつやあめ虫

和安

さくしつやあめ虫のさくしつ

如竹

道の原さくしつやあめ虫

五桂

花明さくしつやあめ虫

花明

ひさしにふりかへるのふしに大

有隣

清き水は清き心なり

玉平

清き水は清き心なり

三瓶

清き水は清き心なり

楊水

全

清き水は清き心なり

鳳尺

清き水は清き心なり

珪舎

清き水は清き心なり

珪砂

清き水は清き心なり

珪車

清き水は清き心なり

黄蝶

清き水は清き心なり

抱村

清き水は清き心なり

珪波

傷心

清き水は清き心なり

珪羅

清き水は清き心なり

清き水は清き心なり

収之

かきりけりや万々おもふの花、友之
 うるまきやうらゝぬけり花の浪、歌山
 朝風や花を惜のけりおもふ、千蝶
 うら月のけりおもふ花の浪、夕紫
 血の浪けりおもふ花の浪、花子
 あゝ花のけりおもふ花の浪、利宇
 花のけりおもふ花の浪、海子

全

ちのけりおもふ花の浪、珪江
 二王のけりおもふ花の浪、川舟
 花のけりおもふ花の浪、雨夕
 花のけりおもふ花の浪、良峯
 ちのけりおもふ花の浪、柏雨
 花のけりおもふ花の浪、暮三
 花のけりおもふ花の浪、晋如
 花のけりおもふ花の浪、馬光

あゝいかにすくなくもけさの月
きとふのしるされぬ人さしきさの
以より病床にぬいて刺さる月の末
のひら此世を去りし死の時の
静むくうー静寂しきうの魂
静み静ま

救りて病床にぬいて刺さる月の末

柳居

雪のうのりゆきて静けしは也

宗瑞

あゝ病床の静けしは也

黒露

月の名も忽ちより静けしは也

吏登

かゝる月の静けしは也

菰青

全

静けしは也

惠瑞

月の静けしは也

紫白

月の静けしは也

都江

月の静けしは也

樓笛

月の静けしは也

坐来

月の静けしは也

寸松

月の静けしは也

栢延

卯の時乃さうも早よゆく奴
る乃新又旧後の事とちりわ情に

筆端のさうも深きゆほいれ 筆端

天王寺かゝるも時や蟬鳴る 珪如

河原も顔りけりやも向うさ 一尺

海ももぬ一巻のゆづる 九黒

夕すゝみやを功徳池の一廻り 一徳

侍る公儀の殿をさういふはるさかの物おきぬ
柳をみゆひもさうも我人も新 野分

暖のいよく白くさのなみ 暁雨

旧知も死にや遠のけつゝ
これよきくものさ

らゝや涼の床は遠もかー 寥和

全

道と之の向きんといふじや 笠翁

その海もな路のもや手向峠 詞言

ふ月の地獄のうきて去んり 在洲

月うんと海浜の橋や蓮の笠 三仏

ふ月十一日いふあけり

こそや枕のふくれ花さうわ 亘通

虫千子能ぬ神や涅槃像

紀逸

卯の時や渾土の蓮もまゝ盛

貞國

うさ秋や河を渡りてや海

竹阿

蓮の葉やむい河の舟の詠よ

ち

石苔や柳新やうー清海崎

竹瓦

以さうふ蓮のほ葉や孤淋

二陶

もね細くても法のももも

雪尾

な衣二りほりけなぬ

乾什

折よりもはらの河のゆきね

團科

ちやもやらの葉とくさ蓮心

木淵

友あはれあつたなりとね

子鷹

とふまいた物積草よまやられ

故一

あつたやあつたある御ふ

歌扇

白きやにちあけ流るのち下枝

谷水

いふふやうにやまの峰のあ

秋葉

やうにやうにふもふ葉のあ

尾谷

佛書曰其相白

涼も秋の道一此の道

羊素

いゝ名のうねる道うね

午風

涙もあふくは汗拭ひ

支川

東うねるうねる柳うね

拍雨

はるもくは松庵のかきも

音雪

不法うねるやあきの道のう

又尺

うねるやあきの道のう

拾翠

魚も目もあふくはうねる

渭北

秋もあふくはうねる夏柳

芳水

うねるあふくはうねる

泊風

うねるあふくはうねる

麻三

水もあふくはうねる

葉注

うねるあふくはうねる

和三

うねるあふくはうねる

露葉

うねるあふくはうねる

いさ

うねるあふくはうねる

祇丞

蛇名にさるるの汗拭ひ

蛇名

なのおれおるほのたふを所

笠澤

そとほつ蟬も着とわゝ衣

袿祥

百の山崎とてや都に

啓史

とぬ月や流るゝるも白水

其木

ふちのやまのふちも平向村

先柵

柳るる力ふとて中すみゝ川

睦候

思ひ出るぬのきふりた庭うぬ

芦邑

山陰の足あふれうゝ草清あ

連馬

何る我時ゝて秋の清く

槁春

桂叟に二とほゝるゝ方の村を去るは

峯遠

おつゝ時をきふとやけぬ人

銀砂

六月の晴ふりてきさのそ那

壺龍

虫ほゝるゝかゝやゝる車

魚川

惜み世をほおひきふりての事

露月

瘞玉

水邊小亭一木

阿列

半秋

ふきくし神子方江妙ひ

六五郎

故
中
也
似
如
曉
香
の
煙
う
り

蓮丈

格系一馬匹馬匹一紫

角露

新編 日本書紀

春蝶

極樂一みきよのりあきと

禹谷

河津のほろぬき

筆房

養子何子に於ては

甲子

白芳

子のハハ新子史を山家の玉

蘭舟

道ちんていふはこれ

東籬

故乃其のありて
満ちて

梅核

あゝ雨の男の散やまのいの蓮

蓮秀

即ち此録ありぬるの母と
出づる今増年と有りて

出子今増年と有り子

郡山

あきあきと成りぬき端牛

講古

新ものねに姑や麻の中

魯三

清くは雪の如く白くは花の如く

桂葉

ちりつと花の如くは法の蓮の如く

蓮井

花の如くは花の如くは唐の如く

時習

花の如くは花の如くは蓮の如く

千文

花の如くは花の如くは蓮の如く

蓮府

花の如くは花の如くは蓮の如く

南都
長江

花の如くは花の如くは蓮の如く

一桂

花の如くは花の如くは蓮の如く

梅水

花の如くは花の如くは蓮の如く

雞漱

花の如くは花の如くは蓮の如く

艸風

花の如くは花の如くは蓮の如く

八志

花の如くは花の如くは蓮の如く

千二

花の如くは花の如くは蓮の如く

古道

花の如くは花の如くは蓮の如く

東下

花の如くは花の如くは蓮の如く

蚊雷

花の如くは花の如くは蓮の如く

樂只

晴くは輝きもや告乃み、
右鷹

るの月さの玉川に潮洞如、
藩車

都さやうも洲と暮る事、
李徑

あの日さる我にほりとりよ、
紫風

所らさしめと悔の日を異に、
法藏寺前 佛和

おきよりい何はちあひちう、
三列 洞口

おし海さ人さきさし一隊、
只川

あき遠きささうさく霜草、
巴圭

晴風ささふたさく朝き、
辨之

あきさしめあひ月とあれ、
其通

雲柳をほささくわいほ、
蓮兒

卯時ささうさくさくさく、
笠間 古淳

あきの葉ささくさくさく、
得秀

初秋ささくさくさく、
小豆原 白汀

あきささくさくさく、
珪路

あきさくさくさく、
巴丘

玉の白け候き切きる蓮の糸、
居川

好の世はあちききのお舟に、
野梅

きききききききききききき、
花外

一ききききききききききき、
聴雨

点武のしきききききききき、
牧音

なのお乃きききききききき、
蓮吟

あききききききききききき、
玉芝

ぬききききききききききき、
雞山

きききききききききききき、
霞紅

きききききききききききき、
漱之

きききききききききききき、
林鴉

きききききききききききき、
一壺

きききききききききききき、
魯洲

きききききききききききき、
頌花

きききききききききききき、
玉柱

きききききききききききき、
仙風

夢ゆふらんもぬ方のをぞおし、
 仙泉
 海しをぬもぬ輝乃るひる、
 風光
 けしきもも輝あ言侍ん、
 規杖
 輝も輝あ去年の別も何月、
 含玉
 まふやるをぞおし、
 濃列
 沙上
 十返のあしむくり神像、
 中津
 東市
 ぞと輝しぬひりぬるあ、
 日列
 珪李
 輝あやるのあやうもかとり
 福井
 曙雲

そのあまうもあふさふの峰、
 吟之
 ぞと輝のけしきや人もあは、
 四猿
 風あしとささのあまう、
 杉葉
 あまうもあふさふの月、
 一舟
 一あもあふさふの月、
 暮雪
 あまうもあふさふの峰、
 郡菜
 物いさふあふさふの月、
 大梅

全

新魂宗のてふ系図

其詩

樓川

新魂宗のてふ系図
あつたをたふす其のふも
糸と糸ありー情なりを
猶小月さふ人そをりー

二七日追福

新魂宗のてふ系図

文綸

寛保乙亥亥載

吉魚川刀



